

史学科の半世紀——五十周年を迎えて——

常 松 洋

はじめに

二〇〇〇年四月、史学科は創立五十周年を迎え、現在学科に所属する教員、大学院ならびに学部学生にとって、二十世紀最後の年や新たな千年紀の始まりと少なくとも同等の、あるいはそれ以上の意味をもつことになった。平均的な人間の事例では、すでに人生の半ばを過ぎて、「初老」と呼ばれる時期にさしかかっているようだが、大学のような研究・教育機関の歴史では、新たな成長と充実の期間に入る時期だからである。とりわけ、大学を取り巻く環境の厳しさに鑑み、新たに発足した大学院博士前期・後期課程の将来を思うにつけ、史学科が発足してから半世紀を経過した事実、小さからぬ意味をもっている。

そのような節目の年に際して、その半世紀を振り返り、史学科の来しかたを見はるかすことは、ただ歴史学研究に携わる者としてだけでなく、今後のさらなる発展を願う者としてもまた、必要不可欠な作業であろう。さいわい、羽溪四明先生による「史学科三十年の歩み」（『史窓』三八号）、狩野直禎先生による「史学科四十周年を迎えて」（『史窓』四八号）という文章が残されている。お二人の文章に依拠しつつ、史学科五十年の歴史をまとめてみたい。当事者ならではの迫力に満ち、情意を尽くした羽溪先生の回想や、それに基づいて史学科三十年間の歴史をスマートにまとめ、さらなる十年を違和感なく書き足された狩野先生の記述に立ち向かうには、筆者の筆力はあまりに貧弱である。また多少なりとも「新味」を打ち出したい。そのような考えから、史学科創設からの四十年は年表風にまとめてみた。なお両先生の文章では不確かだった箇所については、『京都女子学園八十年史』（一九九〇年十二月）で補った。

1 史学科四十年の歩み

一九四三（昭和十八）年三月 京都女子専門学校に東亜科設置の件認可。「支那語（中国語）・馬來語（マレー語）・英語の語学をはじめ、東亜学・アジア史・支那精神史・日本精神史等」からなる「ある意味ではユニークな試みの学科」（羽溪前掲文）。

窓 一九四六（昭和二十一）年七月 東亜科の廃止、外国語科に（甲）中国語、（乙）英語を設置する件認可。ただし入学生は四七年が五名、四八年が三名。英文科の入学生の多さ（同年から四五名、五〇名、五五名と増加）とは対照的であった。

史 一九四九（昭和二十四）年二月 京都女子大学の発足。文学部に国文学科・英文学科とともに中国文史学科が置かれる。三十年間中国に在住された橋川時雄教授の発案によるもので、「中国文学・中国語に比重がかかっていた」（羽溪前掲文）。「先生の頭の中には、中国文学、中国史学そして中国哲学を横断するシノロジー（シナ学）の構想があったのではないか」（狩野前掲文）。当時のスタッフは橋川時雄、村山信一、森安太郎、羽溪四明、金田純一郎の諸先生。

一九四九（昭和二十四）年七月 中国文史学科の志望者がわずか二名だったため、史学科への改組が決定される（羽溪先生の記憶による）が、文部省との折衝の結果、東洋史学科としての認可を受ける。「全国の大学でも珍しい名称」を「背負ってわが東洋史学科は発足したのである」（狩野前掲文）。

一九五〇（昭和二十五）年四月 東洋史学科の開設。

一九五〇（昭和二十五）年六月 史学会が発足（初代会長は橋川時雄先生）。

一九五一（昭和二十六）年四月 「この年度から新入生歓迎会や見学旅行も始まっており、史学会の年中行事の原型がすでに出揃っている」とし、現在のものとは性格を異にするものの「夏季休暇に入っている公開講座も行われている」（狩野前掲文）。

一九五二（昭和二十七）年七月 『史窓』の創刊。「こうした史学会の活発な活動は、当然のこと他の学科にも波及し」た（羽溪前掲文）。

一九六〇（昭和三十五）年三月 『史窓』一七・一八号を合併号として記念号としたが、それは「論文・史料篇とアルバム・回顧録篇の二部よりなる、三二二頁の大冊」となった（狩野前掲文）。

一九六三（昭和三十八）年四月頃 「中村教授が史学科に移籍された頃から、学内で大学院設置の話題が急速に広がり出し」、「当時教務系の学監を務めていた」羽溪先生を中心に設置申請作業が着手される（羽溪前掲文）。

一九六三（昭和三十八）年七月 「東洋史学科を史学科に改称することを含めた大学の改組案が」教授会で承認（狩野前掲文）。

一九六五（昭和四十）年二月頃 大学院の規模構想を学長に答申。

一九六五（昭和四十）年十一月二十日 夏休み返上で「千二百頁にも及ぶ大きな申請書を作り上げ文部省に提出した」（羽溪前掲文）。

一九六六（昭和四十一）年三月 大学に大学院を設置する件認可。文学研究科にそれぞれ定員四名の国文学専攻と東洋史専攻が設置される。

一九六六（昭和四十一）年四月 入学者数が「はじめて百名の舞台に乗った」（狩野前掲文）。

一九七〇（昭和四十五）年十月 那波利貞先生ご逝去。『史窓』第三〇号を追悼号とする。

一九七四（昭和四十九）年九月 田村實造先生、「任命制最後の学長」（狩野前掲文）に就任。

一九八二（昭和五十七）年一月 羽溪四明先生、学長に就任。

一九八七（昭和六十二）年四月二十六日 山田信夫先生、ご逝去。

一九八九（平成元）年三月 狩野直禎先生、学長代行に就任。

2 史学科のこの十年

本稿の執筆に際して参照した狩野先生の回顧には、一九五〇年代は草創期、一九六〇年代は成長期、一九七〇年代は安定期、一九八〇年代は変動期とそれぞれ定義されている。この伝で行けば、一九九〇年代は、第二の草創期（制度的な完成期）・成長期・変動期だったということになるか。いずれにせよ、安定期でなかったことだけは確かである。

一九九一年には、史学研究室がそれまでのL校舎から「新築の馬町校舎ⅡJ校舎」に移転した（『史窓』四九号編集後記）。現在のスタッフで、L校舎にあった研究室の記憶を持つのは、稲本・瀧浪・中山の三先生にすぎない。四年前に退職された籠谷先生から、それ以前は、現在のS校舎東側にある民家を改造した建物に研究室があって、靴を脱いで室内に入っていたという思い出話を伺ったことがあるが、そのような牧歌的な時代を覚えている者は誰もいなくなってしまった。

しかし、この十年間のもっとも重要な世来事は一連の改組である。狩野先生の回顧によれば三十年来の課題であった東洋史学科から史学科への改組が、一九九三年度に実現した。これまでは日本史と東洋史の専攻生しかいなかったものが、西洋史の専攻生をも受け入れることができるようになった。これにともない、西洋史のスタッフが一名増員されて、京都大学を定年退官された藤縄先生をお迎えした。一九九五年度（九六年三月）には西洋史の最初の卒業生を送り出した。

この改組を受けて、一九九七年度からは、大学院文学研究科修士課程も、東洋史学専攻から史学専攻へと改められ、西洋史の学生も入学できるようになった。さらに一九九九年度には、大学院文学研究科博士課程に改組され、従来の修士課程は博士前期課程とされ、新たに博士後期課程（かつてのいわゆる博士課程）が開設された。そして、この年から博士前期課程の入学試験は秋季にも実施されるようになった。春季入学試験も従来と同じく実施されているから、年二回の受験が可能になった。

博士後期課程の開設が学生の要求にかなっていたのか、つまり、せっかく京都女子大学大学院に入学しても、さらに研鑽を積もうとすれば、他大学の大学院を受験しなければならないということが大学院志向の学生を躊躇させていたのか、一九九九年秋の大学院前期課程の入学試験には、久々に十名を越える受験生があった。この時の試験では九名が合格し、春季試験でも四名が合格したから、二〇〇〇年度には十三人もの新入生を

窓迎えることになった。また後期課程にも一九九九年度に二名、二〇〇〇年度には一名の進学者があった。受験者はそれぞれ四名ずつだったから、かなりの狭き門だったことになる。

一九九〇年代は、大学・大学院の改組もあって、教員スタッフの異動が激しい十年間になった。一九九二年度には、新たに地理学の船越先生と、転出された杉山先生の後任として檀上先生をお迎えした。一九九三年度には藤縄先生が着任された。また、この年の六月には狩野先生が学長に就任された。一九九四年度には東洋史の植松先生が香川大学から移って来られ、江川先生がご定年で退職された。翌年度には常松が江川先生の後任として着任し、西洋史の第一期卒業生の演習を担当することになった。個人的に懐かしい思い出である。

一九九六年度、籠谷・林田・杉井三先生がご定年で退職され、翌年度には、大学院史学科の発足にもなって東洋史の永田教授、西洋史の古賀教授、日本史の坂口助教授を新たにお迎えできたが、学長職の任期満了によって狩野先生がご退職になった。一九九八年度には、前年度から病氣療養中だった船越先生がご退職された。一九九九年度には地理学の中村教授、日本史の柴田教授、東洋史（ご専門は西アジア史）の谷口助教授が着任され、また改組にもなって思想研究担当の竹内助教授も史学科に加わられた。

二〇〇〇年十月四日未明、五月初旬から入院されていた藤縄先生がお亡くなりになった。享年七十歳。激動の十年間の掉尾に、あまりにも痛切な出来事が控えていたと言うしかない。ご冥福を祈る次第である。

こうして、二十世紀最後の十年間は、史学科にとって成長と変動、あるいは激動の時代となった（日本にとっても、一九九五年初頭の阪神大震災に象徴されるように決して安泰な時期ではなかったが）。しかし、二十一世紀を迎えるに際して、史学科の成立・大学院の開設と制度的な整備はなされた。あとはこの容れ物にどのような中身が盛られるかである。十年後の記念号が、最新の時期を「大躍進期」と定義するであろうことを確信して筆を擱くことにしたい。

3 教員動向（五十音順、敬称略）

氏名	専攻	着任年月	備考
稲本紀昭	日本史	一九八八年四月	現職
今中寛司	日本史	一九五五年四月	一九五九年三月 同志社大学に
植松正	東洋史	一九九四年四月	現職
江川良一	西洋史	一九八九年四月	一九九五年三月 定年退職
上横手雅敬	日本史	一九五六年四月	一九五八年三月 京都大学に

那波利貞	中山清	中村直勝	中村泰三	永田英正	永井康視	常松洋	檀上寛	田村實造	谷口淳一	竹内亨	瀧浪貞子	高取正男	杉山正明	杉井六郎	柴田純	坂口満宏	古賀秀男	狩野直禎	金田成雄	籠谷眞智子	小葉田淳	愛宕松男	大原信一
東洋史	日本史	日本史	地理学	東洋史	西洋史	西洋史	東洋史	東洋史	東洋史	哲学	日本史	日本史	東洋史	日本史	日本史	日本史	西洋史	東洋史	中国文学	日本史	日本史	東洋史	中国語
一九五三年九月	一九八四年四月	一九六三年四月	一九九九年四月	一九九七年四月	一九六六年四月	一九九五年四月	一九九二年四月	一九六八年四月	一九九九年四月	一九八五年四月	一九八二年四月	一九六一年四月	一九八八年四月	一九八九年四月	一九九九年四月	一九九七年四月	一九九七年四月	一九七一年四月	一九四六年五月	一九五七年四月	一九七一年四月	一九七五年四月	一九四三年四月
一九七〇年十月二十日 逝去	現職	現職	現職	現職	一九八八年三月 退職	現職	現職	一九七七年一月 願いにより学長職を解かれる・名誉教授	現職	現職	現職	一九八一年一月三日 逝去	一九九二年三月 京都大学に	一九九七年三月 定年退職	現職	現職	現職	一九九七年六月 学長職任期満了により退職・名誉教授	一九五七年四月 国文学科に。一九八六年三月 定年退職・名誉教授	一九九七年三月 定年退職・名誉教授	一九七六年三月 定年退職	一九八二年三月 定年退職	一九五三年九月 同志社大学に

窓	西田直二郎	日本史	一九五二年四月	一九六三年三月	退職
	橋川時雄	東洋史	一九四八年四月	一九五二年九月	大阪市立大学に
史	羽溪四明	日本史	一九四八年四月	一九八七年一月	学長職任期満了により退職・名誉教授
	林田芳雄	東洋史	一九八一年四月	一九九七年三月	定年退職
	藤縄謙三	西洋史	一九九三年四月	二〇〇〇年十月四日	逝去
	藤原利一郎	東洋史	一九五三年四月	一九八一年三月	定年退職・名誉教授
	船越昭生	地理学	一九九二年四月	一九九九年三月	退職
	村井康彦	日本史	一九五八年四月	一九八七年九月三十日	日本国際文化研究センターに
	村山修一	日本史	一九五〇年四月	一九五五年三月	大阪女子大学に
	森安太郎	中国思想	一九五〇年四月	一九七一年三月	定年退職・名誉教授
	山田信夫	東洋史	一九八三年四月	一九八七年四月二十六日	逝去
	山本四郎	日本史	一九七六年四月	一九八五年三月	定年退職

※本一覧の作成に際しては、諸記録にあたり、長年勤続されている教員・事務職の方々に確認したりして、誤り・遺漏なきを期したが、とんでもない間違いを犯している可能性もある。かりにそのような事態が生じた場合、記載漏れや誤記の対象となった先生方には心から非礼をお詫びするとともに、正確な情報をお寄せいただくようお願いする次第である。また、本学名誉教授の金田先生、籠谷先生、人事課長楠木純子氏には、格段のご協力をいただいた。末尾になったが、記して感謝の意を表するものである。しかし、誤りなどがあった場合、このお三方に責任はなく、作成者の常松のみが責めを負うことはいずれも言わない。